

# 市民と専門職が繋がるカフェ型ヘルスコミュニケーションの実践

武 田 英 樹

美作大学・美作大学短期大学部紀要（通巻第61号抜刷）

## 市民と専門職が繋がるカフェ型ヘルスコミュニケーションの実践

Implementation of Coffeehouse-type Health Communication in Cooperation with Residents and Specialists

武田 英樹<sup>1)†</sup>

キーワード：カフェ型ヘルスコミュニケーション、対話的アプローチ、地域包括ケア、在宅ケア

### 要 旨

近年、ワールドカフェなどのカフェ型による対話的アプローチが注目されている中、これらの手法を用いながらカフェ型ヘルスコミュニケーションを展開している「みんくるカフェ」という活動がある。小論は岡山県津山市で開催された「みんくるカフェ津山」の実践について報告し、その特徴や課題について整理したものである。

カフェ型の対話的アプローチの効果としては、参加者のポジティブな認知変容に影響を及ぼしている可能性、対話を通じた学習機会の提供やヘルスリテラシーの向上、当事者への理解の促進、専門職への心理的距離を縮める等の効果についてが示唆されている。

### 1. はじめに

近年、ワールドカフェなどのカフェ型による対話的アプローチが医療、福祉分野での研修手法として用いられることが多くなっている。こうしたカフェ型の対話的アプローチは「①参加者全員での自由で主体的な対話が行われること、②専門家と非専門家や、異なる職種間など越境的な参加者の間でも対話が可能になること、などを特徴とする」<sup>1)</sup>。

カフェ型の対話的アプローチの効果としては、自由な対話により、参加者のポジティブな認知変容に影響を及ぼしている可能性について音山らが示唆している<sup>2)</sup>。また、孫は、カフェ型ヘルスコミュニケーションの効果について、対話を通じた学習機会の提供やヘルスリテラシーの向上や当事者への理解が進むこと、専門職への心理的距離を縮める効果について示唆していることに加え、この効果が医療や健康に関する意思決定の質を向上させ、理想的な共同意思決定へとつながるとしている<sup>3)</sup>。

こうした効果から筆者は、地域においてカフェ型ヘルスコミュニケーションの機会が増えることによって、がん末期患者等の在宅ケア促進に向けた医療と福祉の連携促進の場としての活用だけでなく、がん末期について患者や家族が在宅ケアを考えるきっかけや医療福祉従事者への相談プロセスへの行動を促進することになるのではないかと考えている。すでに島根県浜田市では、家庭医が「みんくるカフェ浜田店」において「終の住み処について」「地域医療」、島根県雲南市の「みんくるcaféイズモ」では、「地域づくりの医療」、兵庫県姫路市「みんくるカフェ姫路」では「最期を迎える覚悟 緩和ケアを体験して」などのテーマで医療福祉職と市民の対話を通して、地域医療や終末期ケアなどについての意識啓発が図られている。筆者が参加している「みんくるカフェ姫路」においても、「家族で終末期のことを話す機会やきっかけはなかなかないが、こういった催しがきっかけとなって家族内で話題にしやすくなる」といった意見があった。さらに「が

i)† 美作大学生生活科学部社会福祉学科

ん末期」についてのテーマを設定することで、医療現場において医療福祉従事者にはなかなか話せないことを気軽に話せる環境を創り出すことが期待できる。

筆者は、現在のところ兵庫県姫路市で開催されている「みんくるカフェ姫路」と岡山県津山市で開催されている「みんくるカフェ津山」に、ファシリテーターとして参加している。本報告では、岡山県津山市で初の開催となる「みんくるカフェ津山」による医療福祉カフェの実践について報告する。

## 2. みんくるカフェとは

みんくるカフェとは「みんながくる場」から文字を抜いたものである。「医療や健康をめぐる話題について市民・患者と医療福祉専門職がともに参加して対話を行い、互いに学び合うカフェ型ヘルソコミュニケーション活動」であり、東京大学大学院医学系研究科の孫大輔氏が主宰する活動である。2010年8月より開始し、2014年11月現在で50回以上のイベントを開催し、全国の医療福祉従事者の中でこの取り組みへの関心が高まりをみせている。2015年1月現在で10回の「健康・医療みんくるファシリテーター育成講座(以下、ファシリテーター育成講座)」が開催され150名を超える修了生を輩出している。本ファシリテーター育成講座の修了生たちがみんくるカフェネットワークに参加し、情報交換を行うとともに、北海道から九州までの全国各地で20を超える団体が設立され、修了生がファシリテーターとなって、継続的にみんくるカフェを運営している。

## 3. みんくるカフェ津山の概要

### 1) 目的

一般市民が医療福祉従事者と医療や福祉をテーマに気軽に話せる場をつくることによって、対話を通した市民と医療福祉従事者の関係性を構築し、市民にとって医療福祉従事者が身近な存在になること、さらには地域の医療や福祉に関する情報発信の場として、市民が気軽に情報に触れることのできる場の実現を目指す。

### 2) スタッフ構成および運営回数

「みんくるカフェ津山」は、医師、看護師、医療福祉系大学教員、福祉系学生などのスタッフにより運営されている医療福祉カフェであり、2015年7月に第1回を開催した。医師や同法人の看護師の有志と美作大学生生活科学部社会福祉学科の教員・学生の有志により、現在7名のスタッフが核となり運営をしている。代表を医師が務め、事務局を美作大学生生活科学部社会福祉学科教員が務めている。ファシリテーター育成講座の修了スタッフは、医師1名、看護師1名、医療福祉系大学教員1名の計3名である。

運営は年4回程度の開催を見込んでいる。

### 3) 第1回みんくるカフェ津山の概要

- ①事業名：みんくるカフェ津山
- ②事業内容：医療福祉カフェ
- ③第1回開催日 2015年7月4日(土) 15時30分～17時30分
- ④場所：津山城東むかし町カフェ せせらぎ
- ⑤対象・定員：対象 一般市民 定員第1回 20名程度
- ⑥テーマ：第1回子育て・孫育てしやすいまち
- ⑦参加費：500円(ドリンク・お菓子代の実費)
- ⑧主催：みんくるカフェ津山
- ⑨共催：美作大学武田研究室  
津山ファミリークリニック
- ⑩事務局：美作大学生生活科学部社会福祉学科 武田英樹研究室



写真1 会場：カフェ

#### 4. みんなるカフェ津山の実際

##### 1) スタッフ会議

開催まで月1回のペースで全5回の運営会議をもった。学生から医師と様々な立場のスタッフ構成であることから、親睦の意味も込めて、当初はレストラン等で食事をとりながらの会議形態をとりながら、3回目以降は大学内の教室や研究室を使用し、本格的な会議をもつようにした。別途、会場であるカフェ側とはカフェにて2回、講演講師とは先方の職場にて1回の打合せを行った。



写真2 対話しやすい雰囲気を作る茶菓子



写真3 みんなるカフェ津山立て看板

みんなるカフェ津山の結成に当たっては、近隣地域で開催している「みんなるカフェ美作」との関係が大きく影響した。みんなるカフェを主宰する孫大輔氏より「みんなるカフェ美作」で代表を務める家庭医を紹介してもらい、その繋がりから津山市内でファシリテーター育成講座修了生3名が集まった。運営会議については、「みんなるカフェ美作」の代表者にも出席してもらい、助言を受けながら準備をすすめた。

##### 2) 会場の選定と依頼

会場の選定に当たっては、大学内教室や公民館などの案もあったが、スタッフ間でよりリラックスした環境でという目的を追求した結果、カフェでの開催を最優先に検討することになった。

カフェの店長に対して、みんなるカフェ開催の趣旨と内容を説明し、マイクやプロジェクターを使用するため、貸切が望ましいこと、貸切に伴う会場費を低額に設定してもらいたいことも含めて協力を依頼した。

交渉の結果、会場は貸切で会場費は無料となった。

依頼側の配慮として経営上ランチタイムを除く15時以降の時間での開催することとした。

##### 3) 予算

開催に当たり予算は組んでいない。必要物品はそれぞれのスタッフが勤務する職場で賄えるものに留めるように努めた。それ以外については、各々が自費で準備することとなった。カフェを貸切としたが会場費は無料提供であり、講師は自治体職員を派遣してもらったため講師料も無料であった。今後、講師料や案内状の印刷や郵送の費用の増大が見込まれてくるため、何らかの予算措置が必要となってくるものと考えられる。

##### 4) 参加費の設定

カフェを利用することからドリンクの注文が必須となった。注文と帰宅時の支払いの簡便性と時間短縮を考え、カフェ側と相談の結果、ドリンクと茶菓子セットで500円のオリジナルメニューを作ってもらった。

その他、参加費や資料代などは徴収していない。スタッフも参加者の一人としてセットメニューを注文し、個々でカフェ側に支払う形式をとった。



## 5) 講師の選定

講師はテーマに沿った内容で講演が可能であることは当然であるが、地域に認知される事業としていくためにも第1回の開催は行政に講師出講を依頼した。公的機関からの出講のため、講師料は発生しなかった。

## 6) 当日の運営

当日の参加者は28名であった。参加者の概要は、一般市民 名、医師が3名、看護師が2名、市役所職員が3名、介護支援専門員が2名、大学教員が1名、が運営に当たって、入り口立て看板はカフェ側が独自に作成・設置してくれた。駐車場はカフェ駐車場に加え、近くの観光駐車場を含め15台程度を確保し、案内係を配置した。各テーブルには約束ごとを記載したコルクボードと8色マジック1セット、模造紙1枚、アンケート記入用ボールペン2本を準備した。

限られた時間内で参加者全員に発言の機会を設ける



写真4-2 対話風景

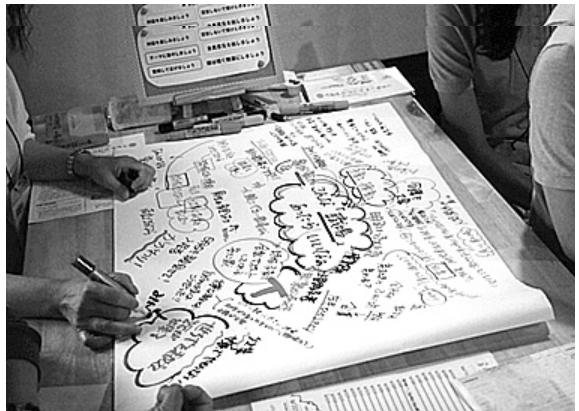


写真5 ワールドカフェ記入風景



写真3-2 受付風景



写真4-1 対話風景



写真6 発表風景

ことは、カフェ型ヘルスコミュニケーションの目的を達成していくために重要であり、ファシリテーターは参加者に約束ごとを遵守してもらう運営が求められた。

約束ごとの内容は以下の6項目である。①対話を楽しみましょう。②テーマに集中しましょう。③質問して広げましょう。④否定しないで受けとめましょう。⑤全員意見を出しましょう。⑥話は短く簡潔にまとめましょう。

受付はスタッフで行い、来店受付時にカフェオリジナルメニューのドリンクと茶菓子セット代金500円を徴収した。着席した参加者から随時、カフェ店員がドリンクの注文をとった。ミネラルウォーターは別途テーブルに紙コップとともに用意し、セルフサービスとした。飲み終わったコップ等の片付け等はすべてカフェ店員がタイミングを見計らいながら行った。会の運営上、後半のワールドカフェでは席を移動するため、前半の講演中にはなるべく茶菓子等の皿は片付けるように依頼した。



写真7 医師によるミニ講義風景

## 5. まとめ

既述のとおり、カフェ型ヘルスコミュニケーションの実践として「みんくるカフェ津山」を開催したが、この活動が市民にとって医療福祉専門職と気軽に対話できる身近な場所として定着していくには継続的な開催が欠かせない。また、当活動の認知度を上げることも重要であるといえる。この度は4社の新聞が告知記事を含め、この活動に関心を寄せ記事を掲載するに至っ

た。今後も報道機関を含めた広報的視点も意識していく必要がある。

第1回の開催を通して見えてきた「みんくるカフェ津山」の特徴として次の3点をあげることができる。第1に医師、看護師から学生に至る多様な立場の者がスタッフとして関わっていることである。これにより多様な年齢層、多様な立場からの視点を取り入れた運営が可能になっているだけでなく、学生にとってはカフェ型ヘルスコミュニケーションの実践的教育の場にもなっている。第2に本当のカフェを開催場所として運営されていることである。多くは街中の会議室などを活用して、主催者の準備したお茶を飲みながらのトークとなることが多いが、津山では地元のカフェが本活動の趣旨に賛同し、全面協力のもの店内貸切での開催が実現している。これにより参加者が会議室など開催される研修ではなく、カフェに気軽に集まり、気軽に対話する穏やかな雰囲気演出が実現できている。ドリンクや茶菓子などの注文に際しても、カフェスタッフが行うことで手作りではない、本当のカフェでの開催を前面に出せたと考える。第3にプログラムの最後に医師によるミニ講座を設定している。これは主催者として医師が携わっている強みを活かす形として、市民が気軽に参加して健康について身近なものとして興味関心をもってもらうきっかけとして設けたものである。

## 6. おわりに

今回の参加者へのアンケートでは、「とても話しやすい雰囲気です、普段遠くに感じてしまいがちな医療関係の方と距離を縮める機会になった」、「色々な世代や立場の方とお話できる貴重な機会であり、今後浸透していけばまちづくりにとってプラスになると思う」「自分の話もできてよい機会となった」「いろいろな立場の方が、それぞれの素直な意見で話し合える素敵な場所だと思った」「とてもよい雰囲気で居心地が良かった」「医師と同じ目線で話ができ良かった」などの意見が寄せられた。これらの意見からも、カフェ型による対話的アプローチはその対話の機会が重要となる。そして、その対話のクオリティを高く保つには

カフェ型と称する環境の設定が重要となることがうかがえる。

今回はカフェ型ヘルスコミュニケーションの実践を報告するにとどまり、その効果検証にまでは至っていない。

ない。

今後はカフェ型ヘルスコミュニケーションが在宅医療・在宅福祉の推進に向けた取り組みとしての科学的検証に取り組んでいく所存である。

表1 みんなるカフェ津山 プログラム

時 間	内 容	担 当
15:00～	受付	学生スタッフ
15:30～	みんなるカフェ津山 開始 開会挨拶 みんなるカフェ趣旨説明	総合ファシリテーター大学教員 クリニック所長（医師） 総合ファシリテーター大学教員
15:40～	基調講演 津山子ども・子育て支援事業計画～つやまっ子にこにこプランについて	市こども保健部こども課
16:00～	ワールドカフェについての説明	総合ファシリテーター大学教員
16:15～	ワールドカフェ（15分×3回+α） 子育て・孫育てする上で ・こんな「医療」あったらいいなあ。 ・こんな「職場」あったらいいなあ。 ・こんな「まち」あったらいいなあ。	総合ファシリテーター大学教員 グループファシリテーター 医師3名 看護師2名 ケアマネージャー1名
17:10～	ファシリテーターより内容発見共有	グループファシリテーター
17:15～	ドクターによるミニ講座 家族でかかれるかかりつけ～家庭医ってなに？	医師
17:30～	閉会挨拶 アンケート	代表：医師 回収：学生スタッフ

#### 引用文献

- 1) 孫大輔「カフェ型ヘルスコミュニケーションによる市民参加型の健康づくり—対話が可能にする変容的学習」臨床作業療法 Vol.12 No.1, 17, 2015.
- 2) 音山若穂, 利根川智子, 井上孝之他「保育者養成における実習指導への対話的アプローチの導入に関する基礎研究」群馬大学教育実践研究 29, 219-228, 2012.
- 3) 孫大輔「カフェ型ヘルスコミュニケーションによる市民参加型の健康づくり—対話が可能にする変

- 容的学習」臨床作業療法 Vol.12 No.1, 17, 2015.
- 4) 孫大輔「カフェ型ヘルスコミュニケーションによる市民参加型の健康づくり—対話が可能にする変容的学習」臨床作業療法 Vol.12 No.1, 16, 2015.

本報告は JSPS 科研費基盤研究 C「医療から福祉へと繋ぐ『がん末期包括ケアシステム』のモデル構築」(26380832, 代表：武田英樹, 2014～2016 年度) の研究成果の一部である。